

完全燃焼への挑戦

vol.77

著者 ▶ 坂井利彰

慶應義塾大学テニス部監督、(財)日本テニス協会公認S級コーチ。96年全日本学生単優勝、全日本アマチュアランク1位、プロ転向後は世界20ヵ国をツアーで転戦し、世界85位のディック・ノーマンから金星を挙げる。世界最高ランク単485位。国内最高ランク単7位。引退後は慶應義塾大学テニス部監督を務める傍ら、大学の支援を受けながら産学連携によるアスリートのセカンドキャリア支援を行っている。エッグボールプロジェクト概要(www.eggball.jp)

プロ選手として世界ツアーを転戦した後、ツアーコーチ、大学監督として、指導者の視点から、日本テニス界を応援するレポートを届けてくれる。

国内で育った選手が トップ100入りをした意味

添田豪が中国チャレンジャーで優勝し、自身初の世界トップ100入りを達成した。この結果に伴い、75年以来世界トップ100の中に日本人が2人いることとなる(錦織圭、添田の2人)。すでに快挙であるが、さらにこの人数は増えるであろう。それだけ国内で育った選手が世界トップ100入りを果たした意味は大きい。添田に続く国内で育った伊藤竜馬、杉田祐一も世界トップ100入りを果たす日は確実に近づいた。加えて、国内大学出身選手を含めたセカンドグループの選手たちにとっても、世界トップ100入りを果たす夢が広がった。ただし、その夢を実現するには「我慢と忍耐の日々」が必要不可欠であることは言うまでもない。何より添田は、03年にプロ

転向してから足かけ8年をかけて世界トップ100入りを果たしたからである。

添田が高校卒業してプロ転向する際、所属契約先が見つからない中の厳しいスタートとなった(現在は空旅・com所属)。「いつか結果で見返したい」と当時漏らした言葉が忘れられない。同世代にはソダリン、バグダテイス、タイプサレビッチ、モンフィス、ツォンガという猛者が集まる中、ジュニア世界ランクでは20位に入っていた。国内では高校総体を、全日本ジュニアを制覇してシニア敵なしであった。それでも、所属契約先が見つからなかったのである。

彼は地域ナショナルトレセンに指定されるほどに素晴らしい荏原湖南スポーツセンターにおいて、笠原康樹コーチ、ロドリゴ・フェルナンデスコーチの二重指導を受けて育った。プロ転向後も、ツアーコーチやフィジカルコーチを帯同してツアー転戦

添田豪がついに トップ100入り

重くして、重いボールを打つように指導されている」との話を聞き、世界トップで戦ってきたコーチのノウハウを垣間見ることができた。ダビド・サンギネッティ氏との出会いには、イタリア人脈のある鈴木貴男、マネジメント面を担当している坂

本正秀氏のサポートも忘れてはならない。添田本人の地道な努力に加えて、多くの方々の情熱とサポートが一体となった結果、国内から育った選手が世界トップ100を実現させたのである。

10代でトップ100入りする 早熟型 20代でトップ100入りする 晩成型

一方、男子世界ツアーでは、ラオニック、デIMITロフ、ベランキスという90年生まれ世代が世界トップ100入りを果たしている。彼らは19歳、20歳の選手である。男子世界ツアーを研究する中で、20代になる前に世界トップ100入りした選手を早熟型、20代以降に世界トップ100入りを果たした選手を晩成型に分類している。26歳で世界トップ100入りを果たした添田は晩成型選手、20歳までに世界トップ100入りを果たしたラオニック、デIMITロフ、ベランキスは早熟型選手に分類される。早熟型選手は、ジュニアから世界トップ100入りまで移行期間が2年間と非常に短い。添田の8年間に對して1/4の早さである。アメリカの大学出身選手であるイスナー、デバマンも大学卒業してから世界トップ100入りまで移行期間が同じく2年間という短い期間である。アメリカの大学を卒業して成功している選手からも学ぶべき点がある。

87年生まれのスウィーティングは全米オープン・ジュニア優勝を果たし、06年からツアー転戦を始めて5年後の11年に世界トップ100入りを果たした。早熟型選手を目指した選手でも移行期間に5年間要している例もあるのだ。ヤングもスウィーティング同様に早熟型選手として注目されたが、現在も世界ランク

120位であり移行に時間がかかっている。統計結果によると、移行期間が長くなると世界トップ30入りを果たす可能性が低くなる。

アメリカのスタンフォード大学を卒業してから世界トップ100入りを果たしたゴルドスタイン(すでに引退して現在はクリーンエネルギーの会社に勤務)は「18歳のときにはプロになる準備ができていなかったから、大学進学に迷いはなかった。大学では精神的にも肉体的にもプロ転向する準備ができた」と語っていた。また、現在世界トップ20入りを果たしているケリーは18歳のときにアメリカの大学USCに進学することを決めていたが、ブレイクから将来性に太鼓判を押されてプロ転向を決断した。彼は「私の人生の中でもたつな決断の二つであった」と語っている。18歳の時点でプロ転向を決断するのは、大きな困難を伴う。ブレイクのような世界トップに精通している助言者がいないかぎり、周りの環境と自分自身を照らし合わせて判断せざるをえない。それだけに周りの環境に日本国内から世界トップ100入りを果たした選手がいるかないかでは大きな違いがあるのだ。



ジュニア時代、早熟型として期待されたヤング(左)と、20代で世界トップ100入りに至るまで苦戦した添田(右)。



苦節8年、ついにトップ100入りを果たした添田